総合教育研究センター
学生向け情報誌
クレードル
第５号
CRADLE
Center for Research And Development of Liberal arts Education
5th issue

言語教育研究センター・総合教育研究センター共催

オーストラリア短期研修報告　語学＋森に生きる

伊藤　義之（人間学部総合教育研究センター）

今年の２月、９名の学生が参加して、オーストラリアで語学と森林ボランティア活動を組み合わせた短期研修が行われました。オーストラリア短期研修は語学が 2007 年、森の活動が 2011 年にスタートしたプログラムで、学生は次の３コースから１つを選びます。

①２週間語学を行うコース　②森の活動を１週間行うコース　③語学１週間と森１週間の組み合わせコース

今年度、③が６人、②が３人、①のコースは０でした。③を選んだ人は１週目、現地の家庭にホームステイしながら向こうの大学で英語を学びました。２週目は、１週間遅れでオーストラリアにやってきた②の学生と合流し、コンドミニアム・スタイルのホテルを借りて共同生活をしました。みんなは森林のボランティア活動に汗を流したり、熱帯雨林の森を見学したりし、雄大なオーストラリアの自然を満喫しました。

第５号　目次

PP. 1-4
オーストラリア研修報告

PP. 5-6
台湾に咲いた「ひまわり」
－21 世紀の学生運動と
台湾の民主化－

P. 7
北斎漫談

PP. 8-9
第３回コラボ授業のレポート

PP. 10-11
教職課程教育関係
ブックリスト

P. 12
心の健康法３
おいしいごはんを食べましょう

～研修をふりかえって～

“ことば”とコミュニケーション

野口　琢磨（文学部国文学国語学科３年）

この研修において、私が一番魅力を感じた所は“ことば”です。ことばとは、生活や活動をするにあたって一番大切な力だと思います。最初は、「異国の地で言葉も通じない。どうしよう」という不安と「どうやって意思を交わしていこう」という好奇心がありました。英語という、自分にあまり接点がない分野でも、日に日に慣れていくことができ、ほんとうに楽しかったです。異国の地で言葉もわからない。おどおどする気持ちや不安になることもありましたが、本当に伝えたいという思いがあれば、相手には伝わるのだと感じました。“ことばより気持ち”それが一番心に残りました。この「森に生きる」を通して、視野が広がりました。国文学国語学科という日本語を専門に勉強している学科なので、海外とは無縁と思っていました。しかし実際に行ってみると、ことばやコミュニケーションの大切さを感じ取ることが出来ました。これは自分が行ってみたからこそ、わかりました。「井の中の蛙」という言葉があるように、自分が考えている世界よりももっと広く、大きい世界があるということを改めて感じました。この「森に生きる～オーストラリア研修」は自分をとても成長させてくれました。近年広がるグローバル化に興味・関心が持てました。

とても新鮮で貴重な体験

岡本　彩（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

学校の授業はついていけるか心配だったけど、とても分かりやすく、色んな国の生徒と接することができて良かったし、英語をだんだん聞き取れるようになっていくことが実感できて嬉しかった。「森に生きる」の作業では外来植物であるランタナの木を駆除した。この作業はオーストラリアに行かなければすることはなかったと思う。ランタナの木がいっぱいだったところがきれいになり、大変だったけど、とてもやりがいがあった。この２週間の研修を通して、自分の語学力のなさに気づけたし、留学をしたいという思いがさらに強まった。またいつかオーストラリアに行きたい。

日本とオーストラリアの英語学習の違いに驚きました

植屋　真之介（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

グリフィス大学は１回２時間授業で、日本の１時間半と比較すると長く感じるのですが、先生と生徒の距離が近く会話中心の授業スタイルになっていたので時間の進みがとても早く感じました。英語は好きなのですがこんなにも授業が楽しいと思ったのは初めてでした。Writing や文法などの能力は他国の学生よりも上なのですが、会話となると聞き取れなかったり、うまく文章が出てこなかったりすることがありました。日に日に会話も上達していき楽しくなっていったのでもっと滞在したかったなという思いにもなりました。帰国して思ったのはもっと英語を話せるようになりたいという欲望でした。課題もわかったのでこれからの英語の勉強に役立てていこうと思います。

英語を学ぶ意味がより明確になった

岩崎　智浩（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

オーストラリアでの英語の授業は日本の英語の授業とは違い英語を話すことに重点をおいています。その授業の間に色々な国籍を持つ人たちと会話することで自分の視野が大きく広がったと思います。ホストファミリーとの会話や生活をしていく中で文化や生活習慣について学ぶことができました。また、休日にはゴールドコーストという有名な観光地にオーストラリアで知り合った友達と行きました。ゴールドコーストは海がとてもきれいでダイビングや海水浴を楽しみました。日本ではできない貴重な体験をすることができ、このオーストラリアでの経験が大学生活をよりよいものにしてくれると思います。

新しい価値観が私の中に生まれた

山口　朋之（人間学部人間関係学科生涯教育専攻 2014 年３月卒業）

今回の「森に生きる」は自然のことを学びながら、海外を直接触れることができる機会でした。一週間海外で生活をして「別世界に行ったな。」というのが正直な感想です。違った自分にも出会え、自分の新しい面を知ることができました。日本に帰ってから公園や街を歩いていると、オーストラリアで学んだ森林に興味がわくようになりました。木を見つけると木の役割や種類はなんなのか知りたくなったり、木を見ているだけで心が落ち着いたりします。オーストラリアは自然を大切にする国で生態系に影響が出ないように、さまざまなことに気を使っていました。自然のあるべき姿をオーストラリアで見ることができたのはとてもいい経験で、日本も豊かな自然の姿になればいいと思います。将来少しでも日本の森林が良くなるような活動に自分が関われるよう、アンテナをしっかりと立てておこうと思います。

ピンチをチャンスに

中川真衣（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

オーストラリアに着いてすぐにグリフィス大学へ行き、スピーキングのプレイスメントテストでクラス分けをしたのですが、着いて半日もたたないうちに大学でクラスに参加しなければならなかったので、疲れと緊張で、ほとんど英語でしゃべれなかったのを覚えています。振り分けられた授業では、中国人とベトナム人しかいないクラスに１人だけ入れられたので、不安と絶望しかなかったのですが、ここはピンチをチャンスに変えて、自分１人でどこまで英語が伝わるか試せる良い機会だと思い、１人で授業を受けました。自分でも、ここまで耐えられるとは思っていなかったので、驚きました。英語の授業にも参加できていると思うとうれしかったです。私はオーストラリアで風邪をひいてしまったのですが、ホストマザーが優しく、わざわざ病院につれて行ってくれてものすごく感動しました。私の英語力がないせいで病状が伝わらず、マザーのサポートがなかったら、大変なことになるところでした。ほんとうにかけがえのない思い出となりました。

充実した、濃い二週間

中島佐綺（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

はじめの１週間はホームステイをしながらグリフイス大学に通いました。私は海外の大学に通うことも、ホームステイをすることも初めてだったので前日からすごく緊張していましたが、大学の先生は私が授業でわからないところがあれば丁寧に教えてくれたし、同じクラスの留学生たちも優しく接してくれたので、すぐに打ち解けることができ、毎日学校に行くのが楽しみでしょうがなかったです。次の一週間は森でのランタナの駆除や観光を主にしました。ランタナは思っていたよりも生い茂っていて、切るのがとても大変でした。しかし、初めの日はランタナで覆われていて見えなかった場所が徐々に切り開けていき、最後の日にはとても見晴らしがよくなっていたのを見て、やりきった感が物凄く湧いてきて、やりがいがありました。オーストラリアで過ごす二週間はとても濃く、毎日が充実していてとても様々なことを学びました。この経験を今後の学校生活や留学に活かしていければいいなと思います。

大きな心、ゆとりのある心を持つ

奥田愛実（国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカコース３年）

オーストラリアは、国土面積が大きいのに日本の二割も人がいないという国です。なので、一人あたりの土地面積は広いです。それででしょうか、オーストラリアは国民性がたいへん大らかで、会う人会う人がとても優しかったです。私が参加したコースは主に森林作業をしましたが、普段は触れることのできないような植物や日本にはいないような巨大なトカゲ…など、日本では頑張ってもできない体験をいっぱいして、大きな心、ゆとりのある心を持つことができた気がします。今回は、たった１週間という期間でしたが、私はまたこの地を訪れたいと思いました。オーストラリアで暮らしてみたい、オーストラリアで働きたいと密かに思っています。今後は、オーストラリアで働くことを目標にして日々勉学に励むつもりです。

異文化を実感･･･驚くことばかり

山下裕子（国際学部外国語学科英米語専攻２年）

オーストラリアでは日本と異なった環境や文化があり驚くことばかりであった。またアメリカ英語と違ってオーストラリア英語といった独特の発音があったり、その国ならではの特徴もあるのだと知ることができた。オーストラリアのバスで運賃を払おうとした際に運転手さんによっていらないと言ってくれる人がいた。これは日本では絶対有り得ない。食事は美味しいものもあったが、やはり日本の方が食の安全はきっちりしているし美味しいものが多い。ホームステイでは食事を作るのを手伝わせてもらった。日本と違った作り方や材料、道具などにもびっくりした。また、食後には大体デザートがついてくる。お昼ご飯を作ってくれる時も、リンゴを丸ごと渡してくれたり、そういった時には改めて海外に来たのだと感じた。日本と異なった環境で過ごすのは難しく大変なことではあるが、それを経験することによってまた新たな発見があったり、自分のためになることばかりだった。

台湾に咲いた「ひまわり」
—21 世紀の学生運動と台湾の民主化—

山本　和行（人間学部総合教育研究センター教職課程）

この文章を書いているのは4月1日、天理大学の入学式の日です。この文章が『CRADLE』に載るころには、台湾の「ひまわり」はさらに大きく咲き誇っているでしょうか。それとも、すっかり枯れてしまったでしょうか。そんな一抹の不安を抱きながら文章をつづっています。

2014 年 3 月 18 日は台湾において、歴史の大きな転換点として記憶されるかもしれません。この日の夜、台湾大学と清華大学の大学生・大学院生を中心とした学生グループが、日本の国会にあたる立法院を占拠しました。4 月 1 日現在、学生たちの占拠はなお続いており、立法院周辺ではさらに多くの学生たちが座り込みを続けています。この行動は学生たちが掲げた花から「ひまわり学生運動（太陽花學運）」と呼ばれています。「ひまわり学生運動」は台湾社会の広範な支持を集めており、3 月 30 日には総統府前のケタガラン大通り（凱達格蘭大道）などで開かれた抗議集会には、警察発表で約 11 万人、主催者発表で約 50 万人の人々が参加しました。この抗議集会に参加した人々は一様に黒色のシャツを着用することで、政府に対する抗議の姿勢を示しました。

なぜ、黒色のシャツを着ることが抗議の姿勢を示すことになるのか？これは、「ひまわり学生運動」が起こった理由と関連しています。今回の学生運動は、中国と台湾のあいだで 2013 年 6 月に調印された「両岸サービス貿易協定（兩岸服務貿易協議）」に対する抗議がきっかけとなっています。この協定は中国・台湾双方において、多分野にわたって市場開放を進めようという内容で、両岸におけるヒト・モノ・カネの流通を自由にしようというものです。学生たちがこの協定に反対する理由のひとつは、中国の巨大資本が台湾に流入することによって、台湾の多くの企業が買収されるとともに、中国からの大量の労働者流入によって台湾の労働市場が中国人に独占されてしまうことへの危機感です。これは、ただ学生たちの就職機会が奪われるという問題にとどまるものではなく、台湾が中国に買収されてしまう、「中台統一」が政治的にではなく経済的な方法によって実現されてしまうことへの危機感を含んでいます。さらに、台湾にとってそのような危機をはらむ協定であるにもかかわらず、現政権の馬英九総統を中心とする国民党が、検討過程を充分に公開しない「ブラックボックス（黒箱）」のなかで協定の調印と立法院での可決を推し進めたことも、大きな反感を呼びました。3 月 30 日の抗議集会の参加者が黒色のシャツを着ていたのは、「ブラックボックス」に対する抗議（反黒箱）という意味を持っていました。

以上のような経緯から、「ひまわり学生運動」は「サービス貿易協定」という個別具体的な対象への反対という意図を超えて、台湾の民主化運動の系譜のなかに位置づけられようとしています。今回の運動は、台湾の民主化運動であるという性格規定からも、あるいは名称のうえからも、「国民大会の廃止」などを訴えておこなわれた 1990 年代の「野ユリ学生運動（野百合學運）」、馬総統の対中政策を批判した 2000 年代の「野イチゴ学生運動（野草苺學運）」につらなる学生運動として理解されています。今回の運動を主導している 20 代の学生たちは、先行世代の学生運動のエートスを引き継ぎながら、確実に学生運動と民主化運動の「伝統」を現在の社会のなかで体現していると位置づけられているように感じます。学生たちを支持する先行世代も、かつての自らの姿を今の学生たちに投影させることで強力な支持を学生たちに与えているのかもしれません。

「学生運動」というと、つい「暴力的」な様子を思い浮かべてしまいます。それは、日本の多くの人々が 1970 年代前半までの旧来的な「学生運動」しか知らないからかもしれません。特に、僕も含めて、1970 年代以降に生まれた世代の人々にとっては、「学生運動」というものをリアルなものとして感じた経験がまったくありません。「学生運動」というのは 30 代以下の人々にとっては「過去のもの」であり、そのような「伝統」を受け継ぐ場所はもはや存在せず、文献などから「想像」するしかない「歴史的事件」です。

しかし、21 世紀の台湾で展開された「学生運動」は、そのように「想像」する旧来的なものとは違うように見えます。現地の報道、大学教員によるレポート、メールやフェイスブックを通じた友人・知人・学生からの情報を見ていると、学生たちの行動はいたって理知的・理性的で冷静に感じられます。「学生運動」と聞いて想像する「暴力的」な様子はほとんどうかがえません。もちろん、日本の 1970 年代までの学生運動もはじめはそのように理知的・理性的なものであり、時間が経つにつれて変質していったように、同様の問題を「学生運動」というものは抱えているのかもしれません。しかし、「学生運動」が「歴史的事件」となってしまった日本の場合と、「学生運動」の「伝統」が現代社会のなかにも息づいている台湾の場合とでは、「学生運動」の果たす役割は大きく異なるのではないでしょうか。大きな違いは、「学生運動」に対する社会的包容力が現代にあってもなお大きいという点にあるように思います。

この「ひまわり学生運動」の展開がどうなるのか、この先にどのような結果が待っているのか、現時点では判断することができません。しかし、台湾の「歴史」を一手に背負うことになった学生たちの行動に、台湾の歴史を研究する者として敬意を表したいと思います。同時に、学生たちの身が暴力にさらされることのないように祈り、できるかぎり望ましい方向に事態が進んでいくことを願いたいと思います。

（追記）4 月 10 日に学生たちは立法院から「撤退」しました。政府による「強制排除」ではなく自主的な「撤退」を実現したことに、今回の運動の質の高さが示されています。立法院の占拠状態が解かれたとはいえ、問題が解決したわけではありません。この文章を、まだまだ流動的な事態に関するささやかな「記録」として残したいと思います。

知多半島のひまわり（2013 年 8 月撮影）「ひまわり」の成長を願って。

北斎漫談

小田　健（人間学部総合教育研究センター）

「綺麗なもの」は所有できません、これが鉄則です・・・などといきなり書き始めても何のことやら、という向きが多いかと思います。もう少し表現を変えて、「美」とは一瞬にして現れ、一瞬にして消え去る、と書き直せばやや分かりよくなるかも知れません。

私は、この３月上旬にその体験をしました。東海道新幹線で、小用を済ませ席に戻ろうとしてふと進行方向左前方の窓に眼をやると、そこから見えた富士山の何と綺麗であったことか。富士山なんぞ、今までに実物、写真、絵画などで数百回、数千回またはそれ以上見てきたはずですが、そのときの車窓から見えた富士ほどに綺麗だと思ったことは一度もありませんでした。しかし、それはまさに一瞬のことであって富士は視界の後方に消え去ったのです。

このように書くと、次のような反論がすぐさま出てくるに決まっています。つまり富士山は大昔からあったし、これからも（大規模な噴火でもないかぎり）綺麗であり続けるじゃないか。何が「一瞬」なものか、という反論です。全くそのとおり。その意味での富士は永遠です。しかし、私はこの文章では「美」という言葉を「ああ、綺麗だなあ」と感じるその感情のことを指す言葉として使っています。そうすると、また反論があるかも知れない。その感情は、一つの記憶としては少なくとも一定程度は持続するのであって、やはり「一瞬」ではありえないと。全くそのとおり。またまたしかし、私はこの文章では「ああ、綺麗だなあ」という感情を、その「綺麗なもの＝美」を所有したい、独占したいという強い願望の意味で使っています。そうしてみると、「富士山を綺麗だと感じる心」を「所有」することが存外にむずかしいことが分かってきます。と言うか、不可能なのです。「富士山は綺麗だ」、「富士山を綺麗だと思うこの気持ち何かのかたちに残したい」、これはなかなかむずかしいことなのです。しかし、人は古来その願望を苦労して苦労して実現しようとしてきました。それが言うまでもなく「芸術」です。

しかしながら、芸術には限界がある。いかに高名で偉大な芸術家であっても、そして綺麗な絵画や彫像を創った人々であっても、美を「所有」したことにはなっていない。その際、美はあくまでもわれわれの精神の外側にしかなくて、われわれの精神の内側に内包されることはない。そのことを、私は冒頭に「美は一瞬にして現れ、一瞬にして消え去る」と表現しました。美を所有したいけれどもそれは不可能である、これは人が苦しむ大きな煩悶、煩悩の一つだと思います。まことに悩ましいことです。

さて、今年になって各地で葛飾北斎展が開かれています。私も先日名古屋のボストン美術館に行ってきました。冨嶽三十六景、有名な絵です。しかし、北斎は富士の美を「所有」できたのでしょうか。私にはとてもそうは思えない。あるいは、北斎は生活のため江戸の人々に富士の絵を提供しただけかも知れない。

ところで、北斎が「春画」（性的行為を描いた浮世絵）の名手でもあったことは、案外知られていないかも知れません。彼の春画は見事なものです。しかし、彼はその天才的技法でもって、「女性美」を「所有」できたのだろうか。やはり、私にはそうは思えない。存外、生活のために江戸の「好き者」に絵を提供しただけかも知れない。要するに、真実のところは現時点では私にはよく分からないことだらけです。

しかし、私にも昔から分かっていることが一つだけあります。最初に書いた、「綺麗は一瞬」ということです。学生時代に読んだ小説で、福永武彦『海市』の冒頭に次のような文章があります。大変好きな文章です。

海上蜃気。時結樓臺。名海市。

「海市」とは蜃気楼のことです。つまり、「美」とは蜃気楼にすぎないのです。まことに、悩ましいかぎりです。

（註）①タイトルの「北斎漫談」は、北斎の膨大なスケッチ「北斎漫画」のもじりです。

②北斎展は、４月２６日より６月２２日まで神戸市立博物館で開かれます。

「超高齢社会の中でターミナルへの備えを考える」について語る　—第３回コラボ授業のレポート—

山本　和行（人間学部総合教育研究センター教職課程）

2013 年度の授業の最後の日である 2014 年 1 月 27 日に、24A 教室で「コラボ授業」がおこなわれました。

「コラボ授業」というのは、「人間学部の先生を中心に、新しい授業の形を模索する動きの一環として考えられたもの」で、人間学部の共通科目である「人間論」の授業の１時間を使って、「ひとつのテーマをめぐって、複数教員による「コラボレーション（collaboration）」を通じて議論し、深めていこうという企画」のことで、今回で３回目の開催となりました（趣旨の詳しい説明は、『CRADLE』第 2 号をご覧ください）。

第３回目の今回は、社会福祉専攻の松田美智子先生が担当されている「人間論５」の授業の最終日に、「超高齢社会の中でターミナルへの備えを考える」というテーマで行いました。「超高齢社会」と呼ばれるように、日本社会に占める高齢者の割合が史上かつてないほどに増えているという現状のなかで、「死」を目前に控えた高齢者に対してどのようなケア（ターミナルケア）を行っていくのか、ということが大きなテーマです。社会福祉の専門家としてこうした事例に向き合っている松田先生に対して、その他の専門に立つ研究者がどのように考え、議論を積み重ねるのかというのがこの授業の大きな見どころのひとつでした。登壇者は松田先生をはじめ、生涯教育専攻の佐々木保孝先生、総合教育研究センター教職課程の山本の３名に加えて、議論を文章として打ち出していく役割を島田勝巳先生、フロアには受講生とともに岡田龍樹先生と谷口直子先生が参加しました。

授業にあたっては、まず、松田先生からターミナルケアをめぐる現状と課題についてのイントロダクションから始まりました。そして、「人間論５」の受講生に事前に書いてもらっていた、ターミナルケアの実践に関するビデオについての感想を見ながら、登壇者が話を進めていく、という形で議論がおこなわれました。

議論は「ターミナルケア」そのものをめぐって、というよりも、その前提となる「人間にとって死を迎えるとは？」といった、「生死」をめぐる問題へと展開していきました。そうした大きな論点を軸に、「死」をめぐる社会性の問題、「意志」・「意識」とは何か、「医療」と「福祉」のズレ、教育や生活における「死」の位置づけ、「生死」と個人主義、などの論点が示されました。また、議論を進めるなかで、それぞれの介護体験や具体的な「死」への向き合い方といった、テーマとかかわりのある興味深い経験が話されたりもしました。人間の「生死」という具体的でもあり抽象的でもある大きなテーマに即した、多様な議論が交わされました。

授業後に集められた受講生のコメントを見ると、「難しかった」、「もっと学生にも話をさせてほしかった」といった意見がありました。議論の内容が人間の「生死」をめぐる問題という非常に大きなテーマへと展開していったために、若い学生さんにはイメージがしにくかったのかもしれません。また、上述したように議論の展開も早く、様々な話題が次々に現れては消えていったため、議論についていくのに精一杯になってしまったということもあったかと思います。学生さんとの議論の時間が作れなかったのは、登壇した教員がしゃべりすぎたせいだったかもしれず、登壇者のひとりとして反省しています。

ただ、それ以上に、「ターミナルケア」も含めた人間の「生死」の問題について、自分自身のこれまでの考え方からより発展して考えようとするコメントも多数見られました。「ターミナルケア」の問題はもちろん社会福祉の専門的な課題ですが、その前提となる人間の生き方（死に方）、人間として望ましい生き方（死に方）をめぐる課題は、宗教、心理、教育といった、人間学部で学ぶあらゆる学生さんがそれぞれにアプローチできる課題でもあると思います。そうした意味で、具体的な課題に対して自分の立場からどのように考えるのか、あるいは他の立場からみれば自分の専門領域がどのように見えるのか、といったことを考えるきっかけになったかもしれません。

「コラボ授業」の試みは 2012 年に始まり、今回でまだ 3 回目です。第 1 回のテーマが「現代人にとって宗教とは何か」、第 2 回のテーマが「成長すること、老いること」でした。第 3 回のテーマと合わせて、人間の「生死」や「成長」といった普遍的かつ具体的な課題をめぐって、それぞれの立場がどのような考えを示し、アプローチすることができるのか、といった論点が見えてきたように感じています。実際に「コラボ授業」という形で授業をおこなうにあたっては、まだまだ様々な反省点や改善点があります。今後も、「コラボ授業」の「楽しさ」や「考えさせられた」という受講生の声に、しっかりと応えていきたいと思っています。みなさんも授業を受講する機会があれば、ぜひ先生たちの熱心な学術的姿勢に触れて、いろんな「ものの見方」に触れてもらいたいと思います。ぜひ、次の「コラボ授業」を楽しみにしていてください。

最後に、「コラボ授業」についてより詳しく知りたい方は、佐々木保孝「人間学部「コラボカフェ」・「コラボ授業」について」（『天理大学生涯教育研究』第 18 号、2014 年 3 月、45－60 頁）をご覧ください。

教職課程教育関係ブックリスト

人間学部総合教育研究センター教職課程（文責　山本和行）

教職課程では今年度、新書を中心に、教育について考えてもらうための教育関係の本を 100 冊購入しました。以下のブックリストはその一部です。すべて、教職課程の共同研究室に配架されています。教職課程の授業に活用してもらうのはもちろんですが、それ以外にも教育について考えるための一助になる本ばかりですので、目についた本があれば、教職課程共同研究室に来て、手に取ってみてください。

杉山登志郎	発達障害の子どもたち	講談社現代新書
森田洋司	いじめとは何か―教室の問題、社会の問題	中公新書
古荘純一	日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか	光文社新書
河合隼雄	子どもの宇宙	岩波新書
岡本夏木	幼児期―子どもは世界をどうつかむか	岩波新書
青砥恭	ドキュメント高校中退―いま、貧困がうまれる場所	ちくま新書
河合隼雄	子どもと学校	岩波新書
稲垣佳世子、ほか	知的好奇心	岩波新書
魚住絹代、ほか	子どもの問題いかに解決するか	PHP 新書
大田堯	教育とは何か	岩波新書
橘木俊詔	日本の教育格差	岩波新書
志水宏吉	学力を育てる	岩波新書
大村はま、ほか	教えることの復権	ちくま新書
米川明彦	手話ということば―もう一つの日本の言語	PHP 新書
志水宏吉	公立学校の底力	ちくま新書
長山靖生	不勉強が身にしみる 学力・思考力・社会力とは何か	光文社新書
堀尾輝久	教育入門	岩波新書
上野一彦	教室のなかの学習障害―落ちこぼれを生まない教育を	有斐閣新書
稲垣佳世子、ほか	無気力の心理学―やりがいの条件	岩波書店
市川伸一	学ぶ意欲の心理学	PHP 新書
市川伸一	考えることの科学―推論の認知心理学への招待	中公新書
斎藤孝	教育力	岩波新書
鈴木翔	教室内(スクール)カースト	光文社新書
池上彰	先生！	岩波新書
内田樹	街場の教育論	ミシマ社
秋葉英則	「エミール」を読みとく	清風堂書店出版部
林竹二	教師たちとの出会い	国土社
齊藤喜博	授業　子どもを変革するもの	国土社
大森直樹	大震災でわかった学校の大問題 ： 被災地の教室からの提言	小学館 101 新書

岡田尊司	子どもの「心の病」を知る ： 児童期・青年期とどう向き合うか	PHP 新書
中村紀久二	教科書の社会史 ： 明治維新から敗戦まで	岩波新書
下田博次	子どものケータイ ： 危険な解放区	集英社新書
諸富祥彦	教師の資質 できる教師とダメ教師は何が違うのか?	朝日新書
大村はま	新編 教えるということ	ちくま学芸文庫
苅谷剛彦	学力と階層	朝日文庫
尾木直樹	子どもの危機をどう見るか	岩波新書
香山リカ	<いい子>じゃなきゃいけないの?	ちくまプリマ―新書
杉山登志郎	発達障害のいま	講談社現代新書
平岩幹男	自閉症スペクトラム障害――療育と対応を考える	岩波新書
橋本武	〈銀の匙〉の国語授業	岩波ジュニア新書
白井恭弘	外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か	岩波新書
内藤朝雄	いじめの構造―なぜ人が怪物になるのか	講談社現代新書
恒吉僚子	人間形成の日米比較―かくれたカリキュラム	中公新書
嶋崎政男	学校崩壊と理不尽クレーム	集英社新書
荻上チキ	ネットいじめ	PHP 新書
藤川大祐	いじめで子どもが壊れる前に	角川 one テーマ 21
リッカパッカラ	フィンランドの教育力―なぜ、PISA で学力世界一になったのか	学研新書
沖田行司	人物で見る日本の教育	ミネルヴァ書房
中村哲	歴史はどう教えられているか―教科書の国際比較から	NHK ブックス
諏訪哲二	なぜ勉強させるのか？―教育再生を根本から考える	光文社新書
本田由紀	教育の職業的意義―若者、学校、社会をつなぐ	ちくま新書
土井隆義	友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル	ちくま新書
苅谷剛彦	教育と平等―大衆教育社会はいかに生成したか	中公新書
二通信子、ほか	日本語力をつける文章読本―知的探検の新書 30 冊	東京大学出版会
苅谷剛彦	学校って何だろう―教育の社会学入門	ちくま文庫
安西祐一郎	問題解決の心理学	中公新書
川喜多二郎	発想法	中公新書
田中保成	消える学力消えない学力	ディスカヴァー携書
斎藤孝	頭がよくなる議論の技術	講談社現代新書
鈴木光太郎	ヒトの心はどのように進化したのか	ちくま新書
高橋敏	江戸の教育力	ちくま新書

こころの健康法３-おいしいごはんを食べましょう。

仲　淳（人間学部総合教育研究センター教職課程）

みなさんの好きな食べ物はなんですか？焼き肉？お寿司？それとも甘いもの？

おいしいものを食べると、人は元気になります。「腹が減っては戦はできぬ」「衣食足りて、礼節を知る」などとも言いますが、なにはともあれ、食べることは生きることの基本です。そして、食べ物には、人の心を立ち直らせる力があるのです。

みなさんは青森県の岩木山のふもとにある「森のイスキア」というところを知っていますか？そこは、「ガイアシンフォニー」という映画にも出演された佐藤初女(はつめ)さんという 92 歳のおばあさんが主催されている、重く心悩む人たちを迎え入れて、地ものの新鮮な野菜などを使った心づくしの食卓を共にするというところです。以前にその森のイスキアに、人生で行き詰まってしまって、「もう死んでしまおうか」と思い詰めて訪ねてきた人が、帰りの電車の中で初女さんが握ったおむすびを食べて、そのあまりのおいしさに心が震えて、「もう少し生きてみよう」と思い直されたことがあるそうです。それはきっとその人がおにぎりをほおばった瞬間に、おにぎりを握ってくれた初女さんの思いが伝わってくるのと同時に、「わたしを食べて生きなさい。あなたはひとりではないのですよ」というやさしい大地（ガイア）の声が、どこからともなく、しずかに聴こえてきたからではないでしょうか？

佐藤初女さんは、料理をもって「いのちの移し替え」と表現しておられます。食べるということは他の「いのち」をわたしの中にいただくということなのですから、ごはんを食べれば元気になるのは、本来自然なことなのですね。それが、だれかによって心をこめてつくられた料理であれば、なおさらのことでしょう。映画「千と千尋の神隠し」にも、ハクからもらった握り飯を食べた千尋が、そのあと大粒の涙をこぼして元気になるというシーンがありましたよね。

前回のサッカーワールドカップでの日本代表の活躍の陰にも、選手たちの様子を見ながら付き添いシェフが現地の材料で毎回創意工夫してつくる、おいしい手料理があったということです。

中国では、古来「医食同源」ということが言われてきました。からだにいいものを食べていれば、丈夫になって病気になりにくくなりますし、やる気も集中力もいつのまにかＵＰなのです。

「よく食べる」ことは　、「よく生きる」ことなのですね。

とにもかくにも、おいしいものはおいしいです！みんなで食べれば、なお一層おいしいです！

おいしいごはんを食べて、こころもからだも元気になりましょう！

✤天理のおいしいごはん関係屋さん

①手作り厨房「天」さん（ホカホカご飯と選べるお惣菜弁当。　天理駅近く。中大路沿い）

②麺屋「一徳」さん（塩ラーメンがおいしいです。　商店街から少し南下。R169 沿い）

③ＯＴＯさん（店内いっぱいにおいしいパンがずらり。　体育学部近く）

④ベーカリーメイさん（一つ一つ透明感のある焼き立てパン。　体育学部近く）

⑤SEVEN　HEART さん（サンドイッチがおいしいです。　天理郵便局近く。中大路沿い）

CRADLE（クレードル）　第５号　2014 年 4 月発行

発行者　伊藤義之　天理大学　人間学部 総合教育研究センター

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050　電話・FAX　0743-63-7092　（内線）6111

印　刷　株式会社　春日